173
74

林學士柴田榮吉遺稿

朝鮮難行記

（代謄寫）

173-74

難行地略圖
凡例
× 難行地点
通過道路
三井經營山林
製炭傳習所
西上面
七月十四日泊
照陽江
春川
七月十日ヨリ仝十二日マデ泊
加平
北漢江
三岳山
大龍山
祝靈山
清平里
七月十五日泊
天摩山
長樂山
洪川江
洪川
七月十三日泊
禾也山
陵谷山
梅谷山
摩石隅里
七月十六日仝十七日泊
金谷里
七月十八日仝十九日泊
忘憂里
九里面
禮峰山
漢江
龍門山
梅花山

難行地略圖

至平壤
凡例
通過道路
難行地点
三井經營山林
製炭傳習所
七月十四日泊
西上面
昭陽江
春川
七月十日ヨリ仝十二日マデ泊
加平
北漢江
三岳山
祝靈山
大龍山
清平里
七月十五日泊
天摩山
洪川
七月十三日泊
長楽山
洪川江
禾池山
陵谷山
摩石隅里
七月十六日仝十七日泊
梅谷山
金谷里
七月十八日仝十九日泊
志臺里
九里面
禮峰山
梅花山
龍門山
漢江
江
N

難行地略圖
凡例
三井經營山林
通過道路
難行地点
至平壤
京城
東大門
清涼里
忘憂里
面
里
九
金谷里
七月十八日 仝十九日泊
摩石隅里
七月十六日 仝十七日泊
禮峰山
江
漢
龍門山
梅谷山
陵谷山
禾也山
長梁山
洪川江
清平里
七月十五日泊
天摩山
祝靈山
加平
北漢江
岳山
春川
西上面
製炭傳習所
七月十四日泊

難行地略圖

凡例
三井經營山林
通過道路
難行地点
至平壤
京城
東大門
清涼里
九里面
忘憂里
金谷里
摩石隅里
禮峰山
天摩山
祝靈山
清平里
加平
北漢江
三岳山
春川
長楽山
洪川江
禾也山
陵谷山
梅谷山
龍門山
漢江
西上面
製炭傳習所
七月十四日泊
七月十五日泊
七月十九日泊

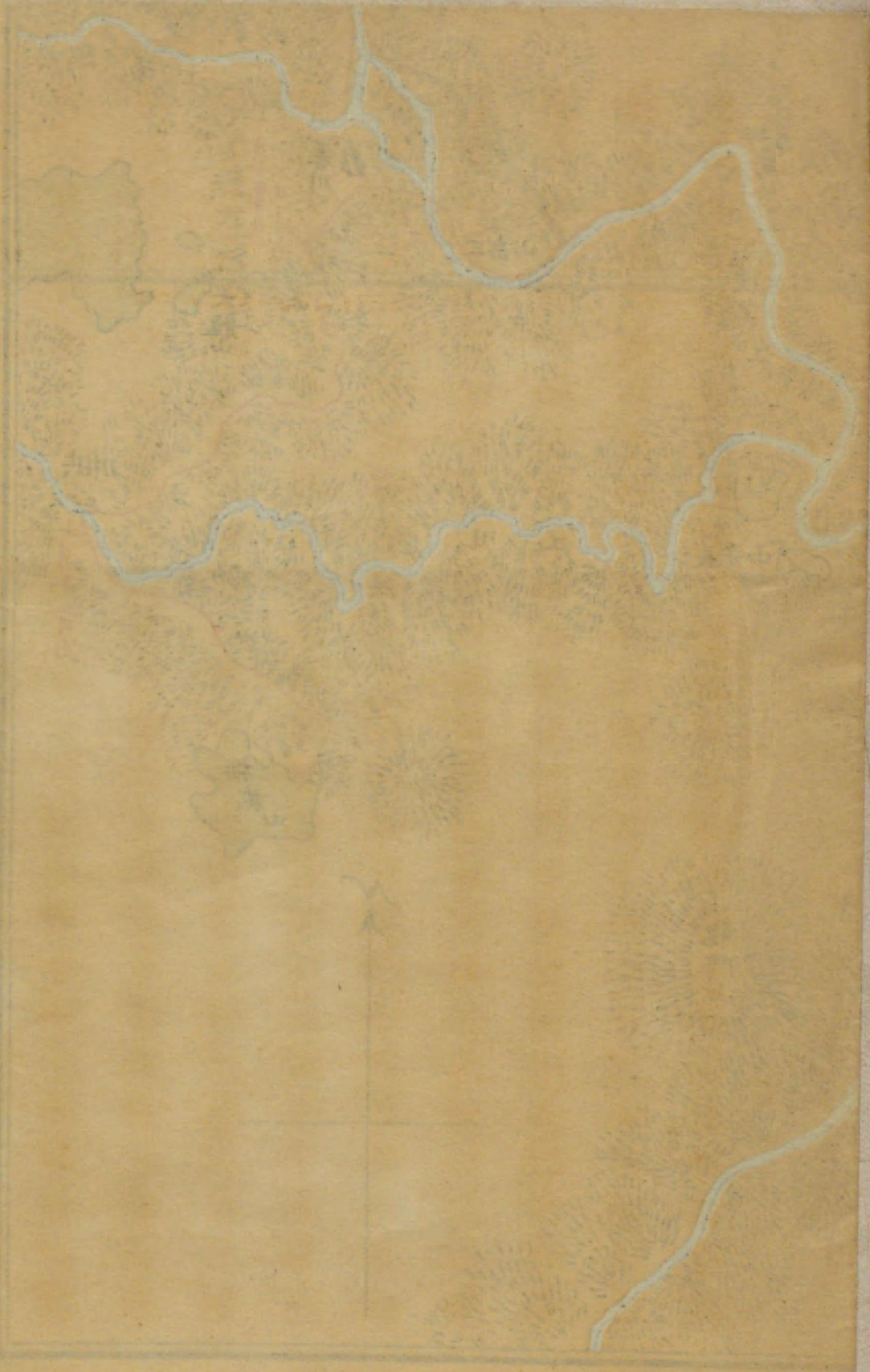
173-74

亡父榮吉、今年の初夏社用を帶びて朝鮮へ旅行致しました
が、會々近年稀有の大洪水に遭つて、非常に困難を嘗め、隨分無
理な旅行を致しました、それが爲め健康を害し、歸京後鎌倉で
靜養して居る内、此の朝鮮難行記を書いたのであります。之が
遺稿にならうとは、神ならぬ身の夢にも想つて居なかつた所
であります。そこで追懷の種として、之を印刷致しまして、生前
お世話になり又は御懇意に預つて居りました方々の御覽に
供し度いと思ひます。

大正十四年十一月亡父五七日忌日

柴田俊子

發行者寄贈本
14.12.9.
寄贈



朝鮮難行記

朝鮮の雨期は、通例七月下旬より八月上旬に及び、内地の梅雨と稍其趣を異にし、連日豪雨降り續き、大小の河川至る所に汎濫し、爲めに旅行者は甚しく困難するを例とす。余は曾て、此雨期に旅行して、辛苦を嘗めたる經驗ありたるを以て、今回の旅行も可成早く切り上げ此雨期を避けんと考へしが、不幸にして遂に大洪水に出會したり。

余は六月二十一日京城着以來、雨期に入る前に用務を片付

けんと志し、急ぎて京元線並に京義線方面の旅行を濟まし、七月七日京城に歸り、八、九の兩日休養しながら京城の用を辨じたり。然るに九日午後より天候險惡、雨模樣となり、夜にかけて雨愈烈しく、翌十日の新聞には、朝鮮の雨期已に至れりと報じたり。されども雨期としては、例年に比し尙早き樣に考へられ、且殘りたる春川方面の巡回を見合すは、如何にも不本意なれば、十日の朝、雨少しも止まざるに拘はらず、最初定めたる日程通り旅行を敢行せんとし、同行者たる農林事務所の結城君の意向甚だ進まざるやに見えたれども、內鮮自働車會社の自働車にて、同君と共に、午前十時雨中京城を出發したり。郊外清涼里を過ぎて、長さ三十間許りの洗越あり、洗越とは、蓋し道路の幅のみ「コンクリート」にて低く固めたる路面に、雨の爲め水流あるときは、常に路面を洗越すに由りて此名あるなり、濁水奔流、深さ已に膝に及べり、斯る水流を自働車にて橫切るは、自分に於て始めての事なれば、甚だ危險なる樣に思はれたれども、結城君に聞けば、運轉手は大膽にして且熟練せる由なれば、彼の爲すが儘に任じたるに、勇悍なる彼は、道の中心を一直線に、而も全速力を以て、巧に突破して、漸く此洗越を渡るを得たり。其後雨少しも止まざるにより、途中清平川方面山林を視察すべき最初の豫定を變更し、歸途に視察する事とし、直に春川に

向け自働車を進めたり。然るに、清平川の手前二里許りの處にある長さ十間許りの洗越は、一部は既に決壞して、其日郵便自働車轉覆せる處なるを以て、熟達せる運轉手も之を涉るの勇氣なし、是に於てか余等は車より降り、下流の方に迂回せり、幸に下流は、其幅廣く、爲めに水淺きにより、車は空にて、余等は通り合はしたる鮮人の背にて、漸く渡る事を得たり、只だ雨に濡れながら汗臭き鮮人に負はるゝは、其の心地甚だ宜しからざりしが、怪我の無かりしは何よりの幸なりき。加平より春川に向ふ間、道は漢江の流に沿て進み、自働車は「アカシヤ」並木の下を馳する事なれば、若し天氣清朗ならんには、頗る爽快なる旅行なるべきに、今日は大雨の中とて、車は全く「カーテン」に閉込められ、鬱陶しさ云はん方なし、時々「カーテン」の間より、右の方漢江を見やれば、水量も丈餘に達し、濁流奔下、其狀實に慘澹たり、左は山上より岩石の將に崩落せんとするあり、路面に落下せる岩石を避けつゝ車を進め、午後四時春川の河岸に着す。

然るに船橋は已に流失し去りて、警官警戒の下に渡船にて漸く交通を開始せる所なり、幸ひ今此方の岸より將に出船せんとす、急ぎ自働車を飛下り、渡船に飛込まんとせしに、此れ以上人を乘せるは危險なりとて、警官は大喝して余等を沮止し、且つ宣言して曰く、「渡船は最早危險に付、今後は禁止す」と、茲

に余等は以爲らく、加平に引返すは馬鹿々々しきのみならず、對岸に春川を見ながら、渡る事の出來ざるは遺憾なり、若し船さへ大なれば、決して渡り得ざるに非ざるなりと、仍りて、運轉手をして、警官に交渉せしめ、幸ひ最寄りに繋留しある川船（漢江を上下して荷物を運ぶ船）に談判し、相當の報酬を與へ、最終の渡船として殘客を悉く收容することに掛合ひ、漸く諒解を得て、余等は急ぎ其の船中に飛込みたり、船は苫を以て覆はれありたれば、降りしきる雨には濡れざれども、苫低きにより其鬱陶しさ云はん方なし、船底には汚水の溜まること五六寸、余は靴を脱ぎ「ヂカ足袋」を穿き替へ、此汚水の中に佇立するのみ、

而も裸體の鮮人、雨に濡れたる支那人と雜居の事なれば、臭氣甚しく、不潔不快なること言語に絶す。漸くにして船は岸を離るゝや、四人の船夫は艫を執り、渾身の勇を奮ひたるも、瞬く間に船は四五丁川下に押流され、纔に對岸に着し、夫れより徒歩渡頭に至り、鮮人家屋の檐下に待つこと三十分、春川より迎へに來れる内鮮自働車會社の自働車に乘りて、漸く春川に着せしは午後六時頃なりき。乃ち旅館イロハに投宿す、濡れたる服を脱ぎ、底深き五右衞門風呂に入浴し、洗立ての浴衣に着替へ、始めて蘇生の念を爲せり。夜を徹して雨少しも止まず。

翌十一日、漢江の水量は增加して三十尺を超へ、昭陽江も亦

之に準じ、兩江の水溢れて、春川邑は殆んど島狀をなし、交通全く杜絶せり、幸ひ春川邑は江原道廳及春川郡衙の在る所なれば、此日は此等官衙を訪問し、十二日は總督府山林課出張所長安部氏の訪問を受け、又製炭に經驗深き中村組の野尻氏の來宿を乞ひ、林業及製炭上の話を聞くことを得たるは、雨中ながら思はざる幸なりき。午後より天氣霽れ、夕刻に至りて、只洪川街道のみ交通漸く開けたりとの吉報を聞く、仍りて翌十三日には急ぎ洪川へ出發することゝし、早朝自働車を雇ひ洪川に向ふ。行くこと里許、濁流奔下せる一の洗越ありたるも、無事通過するを得、尚山崩れ二三ケ所ありたるも、其處丈け下車步行

したるのみにて、午前十一時洪川邑に着、午食の後、郡廳警官駐在所を訪問し、午後一時頃より洪川の濁流を渡り、梅花山、貢谷山方面を視察して再び洪川邑に歸れり。此日も溪谷の水量尚減ぜず、之を渡るに腰を沒せし事幾回なるを知らず。

十四日、洪川を出發、午前十一時春川に歸り、午食を濟まして、午後安倍氏の案内に依り、馬を賃して、書院山を經て六里を隔てたる西上面に向ひ、大阪杉田氏の經營に係る製炭傳習所を訪問せり。此間道路の全く決壞せる所あり、漢江は依然として水量を減ぜず、余等はその濁流をも渡らざるべからず、且つ西上面に近づくに從ひ、道路の急にして、且細きと、溪流悉く出水

せるが爲め、少からざる時間を要し、一行皆疲勞を覺え、午後八時漸く傳習所に着する事を得たり。

十五日朝、傳習所主任菅原氏の案内に依り、數ケ所の炭釜を見學し、獲る所少からず、午前十一時同所を出立し、漢江に出でしは十二時頃なり、朝菅原氏の注意もありたれば、河舟を雇ひて春川まで下らんとせしも、船夫皆耕地に出でゝ在らず、已むを得ず、又馬にて春川に向ひたり。二時頃より天候險悪、最初は小雨なりしも、午後三時昭陽江を渡り、方に上陸せんとせし時、暴雨襲來、多少雨に濡れたるも、幸ひ春川より迎へに來りたる自働車に驅け込む事を得たり。之に同乘したる春川郡務課長は語りて曰ふ、此附近の百姓は「遠からず稀有の大洪水あり」と噂し居るこごなれば、貴君は早く內地に歸られよと、此豫言の適中せしこと實に驚くべく、果して其日より降雨連續、六十年來未曾有の大洪水を惹起するに至りたり。

かくて午後四時春川に歸るや否や、特に京城迄の自働車を雇ひ、雨中同地を出發したり、然るに漢江の水量多く、流れ急なるにより、之を渡るに約一時間半を費やし、それより加平に至る間の道路は、曩きの洪水により處々崩壞し、爲めに自働車の動搖甚しく、且つ加平より進むに從ひて、雨愈々烈しく、清平川派出員の社宅に着したるは、已に午後七時を過ぎたる頃なり。

此日の旅行も終日難路に苦しめられたる事なれば、相當に疲勞を感じたりしも、幸ひ新調の浴槽に入浴することを得、全く終日の疲勞を忘れたり。

十六日、前日よりの雨、降り止まざるも、往路に雨の爲め視察を延期したる陵谷山をば、今度は是非視察したる上、夕刻には京城に到着の豫定を以て、自働車にて派出所長及保護員と共に、清平川を出發したり。先づ街道を二里許り走りて、其處に車を待たせ置き、夫れより半里許りの畦路を北行、漢江岸に出づれば、濁流奔下して物凄し、前日より派出所長が、特に命じ置きたる渡船により、漸く左岸に渡る事を得たり。此頃より雨愈々

烈しく、此處より余等の爲めに準備せられたる駕籠に乘り、山路を辿りて進みたり、駕籠には通例「カバー」を裝置するも、自分には鬱陶敷、且つ兩側の林相を視る能はざるより「カバー」を用ひざる爲めに、其形恰も舊幕時代大井川の渡に用ひたる、所謂輦臺に異ならず、其上にチカ足袋の儘、脚を組み、膝には油紙を覆ひ、兩手にて洋傘をさしたる姿、如何にも珍無類の風態なり、而も溪川を右に渡り、左に越へ、坂を上り或は下る、駕籠上の客も餘り樂には非ず、且つ駕籠人夫も時々休まざれば、到底其勞に堪へざる樣子なれば、余は時々駕籠より下りて步行することゝし、陵谷山中に進入すること一里半に及び、強雨中ながら

十分に林相を視察する事を得たり。既に視察を果したるを以て、道端に在る鮮屋の檐下に一同雨宿りを爲して休息す、時に午後二時、依て生卵を以て一時の餓を凌ぎ、之より元の道に引返へせるが、強雨毫も止まず、溪川の水量愈々多く、益々渡渉に困難を感ぜり、殊に最下流に至つては、一同種々考究の結果、駕籠人夫の最も強健なる一人を選び、豫め試渉せしめ、一同其線路を渉る事に定め、自分は先づ人夫の肩に跨り、水は殆んどその肩に及び、戰々兢々辛うじて急流を横斷して對岸に着くことを得、一同其跡に從ひ、何れも肩迄水中に沒したるも、無事渡渉する事を得て安心せり。

午後三時、漢江左岸の一部落に着す、一同握飯を喫し、小憩の後、再び漢江を渡らんとするに、水勢其急を增したれば、渡船の操縱容易ならず、而も船頭僅に二人のみなれば、其苦心實に氣の毒なり、恰も此際篠つく大雨襲ひ來りたれば、其凄さ云はん方なし、去れども強大なる雨粒が水面を打つの壯觀は、自分は未だ曾て見ざりし所にして、今之を目擊して又一種の面白さを覺えたり。此くて漢江を右岸に越えて、小溪を渡ること三回、漸くにして待せ置きたる自働車を見ることを得、最早前途樂に京城に歸り得ることゝ思ひ、意大に安く頗る愉快を覺えたり。當時自分の服裝は、腹部以下半身全く水に濡れて、氣持宜し

からず、此儘に自働車に乘るは、衛生上にも面白からざるに依り、一民家の温突に入り、衣裳を脱して悉く鞄の中のものと之を着替へたり、殊に「ズボン」は連日の强行に膝の邊裂けて最早用を爲さゞるにより、保護員の乞により、記念の爲めに之を與へ、デカ足袋も之を靴と穿き替へ、名和君及保護員と手を別ち、結城君と余と兩人、自働車内の客となり、降りしきる雨の中を京城に向ひたり、時に午後五時。

途中自働車を急がせ、やがて摩石隅里に至る、停留場に於て運轉手に食事を取らせ、元氣を付け、此處にて尙一人の運轉手を增加し、勇を鼓して停留場を出發せり。然るに直ぐ村端れに

洗越ありて、濁流奔下せり、一時間前迄は水量少かりしも、今や水旣に深し、一人の運轉手は車より降り、石を投げ水流を測り、半ば徒涉せるに、流れ急にして石礫盛んに河底を流下するも、驀進せば大丈夫なりと信じ、是に於て中央を一直線に突進せんと決し、互に相警め進みたるに、水流急激なる爲めに、車は下方へ押流され、將に顚覆せんとするに至りたり、仍りて突嗟運轉を止めたるに、車の停止するや否や、激流之に衝突し、遂に濁流は見る〳〵車臺上にまで浸入し來り、結城君は急ぎ濁流中に飛込み、自分も亦躊躇すべきに非ざれば、續きて靴の儘に濁流中に飛込みしが、幸にして岸迄の距離六、七間に過ぎざりし

かば、水深腰部に達したるにも關はらず、左程困難なしに岸に這ひ上ることを得たり、折柄大雨降りしきり居りたれば、近き民家の温突に入り、結城君の再び水中に入り自働車より荷物を運び來るを待ち、更に自働車停留場の運轉手の宅に入り、取敢へず温突に腰を下したり。さて今宵は何處にか宿を求めざるべからず、然るに此處には内地人としては一人の巡査の住居せるのみなれば、結城君は先づその駐在所を訪ひ、宿泊を乞ひたるに、奈何せん、其室は極めて不潔なるのみならず、巡査は獨身者にて到底食物の調理其他の斡旋を爲し得べくもあらず、却て巡査より余等の腰を下せる運轉手宅の温突を紹介せ

られて、遂に其處に宿泊する事とはなれり。

余等の宿の亭主たる運轉手は、附近の村人を狩集め、縄を顚覆せる自働車の車輪に結び付け、雨中大努力にて漸くに之を陸上に引上ぐる事を得て歸宅し、余等に向て今日の失敗を陳謝したる後曰く「此部落には私の温突より外に泊つて頂く處なし、幸ひ私は内地語も話しますし、粗末ながら宅では内地料理も出來ますから、何なりと申付け呉れ」と、其意甚だ懇切なり。乃ち余等の濡れたる衣類は、悉く洗濯を命じ、温突内に吊るし乾かし、幸に鞄内の浴衣は濡れざるに依り、之に着替へ、結城君は巡査より浴衣を借り來り、余等更に各々之に着代へ、温突に

横臥して、互に怪我のなかりしことを喜び合ひたり。

亭主は坐布團と枕とを何處よりか持來りたれど、脂染みて不潔を極め、其儘にては到底用ふること難し、依て鞄の内より「シャツ」及「ズボン下」を取出し、之を包み覆ひて使用したり。午後八時頃に到り、漸く食膳運ばれたれば、内地料理を食し得る事と樂み居たるに、米飯は匙により喰ひ得らるゝも、菜は到底口に入るべくもあらず、已むを得ずして、飯に生卵をかけて、僅かに空腹を凌ぎたり。却説是より先京城へは、十六日夕刻に歸城の事に、春川より打電し置たれば此儘今日歸城叶はざる時は、黑澤君も心配するならんと氣遣ひ、先づ清平川の名和君の處へ依頼し、加平より京城へ電報を發せんとし、午後六時頃清平川へ向け特使を派出したり、然るに漢江上流溢れて街道を沈め、沿道の家屋續々流失する狀況にて、前程全く杜絕、爲めに十一時頃に至り、特使は空しく歸り來れり。

夜に入りて、余等は温突の土間の上に何等敷物もなく其儘寢るべきことかと、當初心配し居りたりしが、亭主は敷布團ありとて、温突一杯の布團を一枚提供し吳れたり。此れも坐布團と同樣不潔にして、蝨と黴菌の生息所らしく見ゆるも、之を用ひざれば、身體痛くて堪へざるべし、依て恐る〳〵之を敷きて其上に横はりたるに、晝間の疲勞も少からざりしことなれば、

直に眠に就き、翌朝迄何も知らずに熟睡したり。
翌十七日も雨尚止まず、村端れの洗越の水勢も減少する模様なし、去れども其上流を迂回せんには渡り得べしとの事を聞き込み、昨日雇ひたる人夫を特使とし、今回は京城の方へ三里許りなる金谷へ遣はしたり、金谷は李太王の陵の在る所にて、巡査駐在所もあり、京城への電話の便も多ければ、黒澤君への通話を警察へ依頼せしめ、歸途罐詰を買はしめたるに、三時頃特使歸りての報告に、水害の爲め電話に故障ありて不通、警察よりの報告も爲し得ざる次第なりとて、只牛肉の罐詰一個と福神漬一個とを持歸りしのみ、只だ此日の夕食には、此罐詰ありし爲め、ウマく食事を採ることを得たり。さて食後考ふるに、何日まで此處に滯在すればとて、自働車修繕の目途もなく、又道路開通の見込も付かざれば、明日は今日特使の渡りし洗越の上流を渡り、徒歩にて到達し得る處まで行き、假令一二里なりとも京城に近付かんことこそ可けれと、乃ち明日之を決行することゝ定めて、早く眠に就きたり。
明くれば十八日、小雨なるを幸ひ、午前九時摩石隅の溫突を發し、手荷物はチゲ人夫に脊負はしめ、洗越の上流に至り、淺き所を擇び、結城君とチゲ人夫とに手を引かれ、無事に渡る事を得て、街道迄戻り、行くこと二里半、道路崩落の箇所あり、右手田

畝の畦路に傳うて進むに、泥濘深く、歩行頗る難澁せり。
正午金谷着、郵便局及警官駐在所に至り、前途出水の状況を聞くに判明せず、路傍の一少年に問ふに、答へて曰ふ、「之より半里行きし所に出水あり、街道を沈め、通行し難きも、右手松林を迂回すれば、一里先にて復街道に出づべし、夫れより先きは通行し得るや否や判明せざるも、恐らくは忘憂里迄は通行し得べし」と、是に於て余等は行き得る所まで進まんと決心し、先づ佐々木と云ふ内地人唯一の商店に立寄り、中食を採らんとせしに、米飯は無し、依て素麵を賣る事を賴めり、此店には駄菓子「サイダー」素麵罐詰の類を僅ばかり店頭に陳列せるのみにて、

現在は商賣せる樣にも見えず、主として養蠶を業とせるものゝ如く、昨日人夫が持歸りし罐詰も、此店より買ひ來りしものにて、最早殘品は一二を留むるのみ、至て貧弱なる有樣なり。
素麵に空腹を癒したる後、摩石隅より連れ來りしチゲ人夫は、此處より返へし、新に馬を雇ひ、荷物を運ぶことゝし、都合に依れば、此馬にて水を渡る積りなり、此朝途中より偶然道連れとなり同行せる一鮮人あり、甚だ輕裝にて猿股に「シヤツ」を着けたるのみ、彼の云ふ所に依れば、若し途中出水に遭はゞ上流に迂回するか、或は泳ぎてなりとも、急ぎて京城に行く積りなりと、依て余は、彼れ必ずや余等に先だちて京城に着する事疑

なしと思惟し、乃ち結城君より黒澤君宛に手紙を認め、其書を彼に託したり。

午後一時余等は金谷を出發、行く事半里、果して漢江の水溢れて街道を浸せること三丁、深さ五尺に達し、到底進行し難し、乃ち嚮に金谷にて少年より受けたる注意に從ひ、右方松林に入り、水見舞連の行くを頼りに、その方向に進みしに、却て非常の迂路となり、或は林内、或は宅地、或は田圃の畦路を辿ること里餘、其間凡て泥濘にして歩行甚だ困難なりしも、漸く街道に出づる事を得て、一旦は大に喜びしに、何んぞ計らん、前方を望めば泥水漫々として湖海の如く、約半里の間街道を沈め、只梢頭を顯はせる並樹と電柱とにより、其方向を知るを得るのみ。今は詮すべなし、到底四五日は此出水の減退する見込もなく、且つ此邊には宿泊すべき家もなきにより、金谷に引返へすことに決し、此度は僅少の迂回を爲したるのみにて、再び金谷に歸着したり、此くて前刻中食を取りたる佐々木に至り、水の退く迄宿泊せん事を乞ひしが、人手もなく食事の用意も出來ずとて拒絶せられたるも、強て頼み込み、遂に屋背にある離れの日本座敷に「ゲートル」を解きたり。

日本座敷と云へば立派の樣なれども、實は養蠶室にて、近頃迄此室にて養蠶したることなれば、其臭氣甚しく且つ塵埃も

多く、夫れを家婦が掃除の眞似事をしたるに止まり、茶も持ち來らず、余等は殆んど居候同樣の取扱を受けたるが、唯だ結城君が半ば宿の用事を達し吳れたるは、非常に嬉しく感じたり。然るに余等は十六日以來入浴せざるのみならず、此日の道中非常に難義したる爲め、疲勞殊に甚しく、到底入浴せざれば疲勞の幾分たりとも癒やす事難きにより、入浴の準備を佐々木に乞ひたるに、風呂の用意なし、止むを得ずして結城君は附近の小學校長の宅に至り、事情を陳し、殘り風呂にても宜しきにより入浴を許されん事を懇請せしに、快諾を受け、後刻來浴の事を約して歸り來れり。彼此れする內、少女が夕食の膳を運び

たるも、食器は或は毀損し居り、或は汚く、菜は殆んど食し得るものなし、依て饂飩を煮て卵をかけ、漸く食事を濟ましたるに、時既に八時、約束の時刻となりたれば、二人連れにて校長宅に至り、入浴の望を達して、大に疲勞を癒やす事を得たり、浴後三十分許り談話を交へ、歸宿直ちに寢に就く。

翌十九日、遲く起き出で、昨夕校長より借り來りたる雜誌を讀みつゝありしに、巡査來りて李太王陵を案內せんと云ふ、依て浴衣がけにて同陵を參拜す、陵は後ろに山を負ひ、兩側に丘を帶び、三方に樹木欝蒼たり、境內は一面の芝生にして、參道のみ石疊を敷き、陵の前面には、一段高く石を以て疊まれ、祭殿の

設けあり、其前には、兩側に文武官の石像及び樣々の動物の彫刻竝立し、陵としては風致も富み、且つ尊嚴を保たれたり、去れども巡査の言ふ所に據れば、鮮人の參拜するもの甚だ稀なりとぞ。禁獵の地なれば、境內は鳥類の樂園となり、殊に四五本の樅の木の梢には鷺の巢あり、鷺群其邊に集まり、悠々として遊べる狀、如何にも樂しげに見えたり。

陵よりの歸るさ、途上聞く所に依れば、至る所の出水大に減退し、已に辛うじて京城より水を渡りて來りたるものありと、依て余は午後に此處を出發せんには、京城迄到達し得ざるに非ざるべしと考へたれども、明日を待たば、必ずや容易に行き得る事と信じ、明朝出立と定め、結城君が校長と、巡査の宅とに挨拶にとて出で行きたる後、余は早く寢に就きたり。然るに十一時頃に至り、突如「お休みですか」と呼びて戶を叩くものあり、起出て見れば京城の農林事務所の崔奎君なり、「君はどうして能く余等の居所が分かつたか」と問へば、答へて曰ふ「本日午後五時頃、使が來て結城氏の手紙を受取り、始めて皆樣の消息を知り、所長の命により御迎に參りました」と、やがて結城君も歸り來りて鼎座、談話に晷を移し、因りて京城水害の狀況をも知悉することを得たり。崔君は附近に知人あり其處に宿泊せんとて辭し去る、余等も亦直ちに就寢せり。

二十日、午前八時頃金谷出發、勇氣前々日に倍し、京城に向ふ。途中出水は悉く減退し去りしも、泥土路面に殘りて歩行に可ならず、此處彼處路側に倒れたる溫突を見つゝ九里面に至れば、人車ありて余等を待つものゝ如し、早速に之を雇ひ、玆に漸くにして車上の人となり、覺えず快哉を叫びたり。此より前程、最も水の深くして心配なりし淸涼里の洗越は、人車と共に渡船にて容易に渡るを得、進んで淸涼里に入れば、殆んど全部浸水の迹を殘し、流倒家屋も多く、滿目慘澹として、何れの家も復舊に忙しく、大學は避難民の收容所となり、周圍の垣塀は洗濯したる衣類の干場となれり、左顧右眄此等の光景を視ながら、出水當時の狀を偲びつゝ、京城南山町天眞樓に着したるは、實に其日の正午にして、一先づ此處に旅裝を解きたり。

終りに臨み、旅行中の雨量を示せば左の如し。

七月	九日	四八ミリメートル
	十日	一八〇 〃
	十一日	一五一 〃
	十五日	二四 〃
	十六日	八六 〃
	十七日	二二一 〃

十八日
二十日　一四四　〃

大正十四年七月

鎌倉に於て

柴田榮吉記

十八日
二十日
一四四

鎌倉に於て

大正十四年七月　　柴田榮吉記